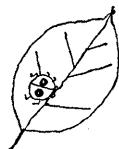


「基本的生活態度の形成をめざす指導」の研究(四)

|| 実践の考察から得た指導の観点 ||



仮性とよ子・服部
稻岡百合・谷川馨
敬

④ 抵抗の克服

先に述べた自己発見、自己創造が、安易な妥協や單なる順応におちついてはならないことはもちろんである。困難な状況に際して、自らそれを克服しようとする強い意志的エネルギーこそ大切なのである。このためには、子どもに抵抗に立ち向かわせるという積極的な方法が求められることになる。事例の中では、この場面が極めて少なかつたが、例えば「(まま)とをしようと A、B 児が衝立をたてている場面) Aえらいな。B重たいな。Aできひんし先生にいおうか。Bあんたいいや。A先生できひんわ。Tああ、きばつしているのね、もうちょっと頑張ってみたら? みてあげるからね。(二兎やつとたてる) Tやつとできてよかつたね、遊びがすんだら、また二人でもどせるわね」のような場合、

このときの子どもが、教師の意図による抵抗の条件を更に克服しようという姿勢に意欲を示している。

つまり、現在より更に高度な生活態度に向かって前進しようとする姿勢が顕著に示されているのである。これは働きかけのように、示唆、暗示、助言といったものではない。むしろ一見子どもには不利とさえ思え、嫌悪感さえ抱かせるような条件を与え、子どもをそのような条件でさえも、積極的、意欲的にそれに立ち向かわせることである。もちろんこれは教師対子ども、子ども対子どもが無事に抵抗を克服した場合、子どもはその成功を喜び、自信をもって次の不利な条件にも立ち向かう姿勢を示すことである。この意味において、抵抗を与え、それを克服させることは子

どもに自信を得させ、より高い生活態度に向かわせる大切な条件であると考えられた。

しかしだだこの抵抗は不斷に与えられるものではなく、働きかけによる自己発見の経験をくり返している間に、時折り自然な形でそれに出くわせることが大事であろう。いわばどうしてもそれをやりとげなければならないという必要感が子どものうちにあることが重要なのである。そうであつてこそ子どもたちはそれを力強く乗り切ろう、克服してみようとする姿勢になることができるのであろう。もちろん抵抗の克服は、今まで述べてきたような受容や理解によってかもし出されたラボール（心のつながり）の

感情がなかつたならば、それが一種の恐怖感を起こすであろうことは、いうまでもない。愛情、包容の中でこそ抵抗は克服されるのである。また克服したあとでの満足感を大切にしてやりたいし、そのための激励や賞賛のあり方を考えるべきであろう。

事例(1)

子ども	教師	教師の気持ち
(まほご)ことをしよう とA、B児が衝立をたてている。 Aえらいな。		

A、B (うなづく) (考察)	Aよいしょ (教師の顔を見ながら動かす) B押すで。 Aええわ。	ああ、きばつてしまふね。もうちょっと頑張ってみたら。みててあげるからね。どうしてもできなかつたら手伝つてあげるからね。	ああ、きばつてしまふね。もうちょっと頑張ってみたら。みててあげるからね。どうしてもできなかつたら手伝つてあげるからね。	はげましてやろう、どうしてもだめだつたら手ををそらね。どうしてもできなかつたら手伝つてあげるからね。	はげましてやろう、どうしてもだめだつたら手ををそらね。どうでもできなかつたら手伝つてあげるからね。	と、えらいことでものりこえさせたいと心の中で励ました。
・子どもたちは、最初は自分たちですつもりであった。 ・教師が偶然部屋にはいったので急に甘える気持ちになつたよう	やつとできてよかつたね。	教師をあてにしないでやりだしたことがあれしかつた。	こんなえらいことだと思わせず、いやなことにもたちむかつていこうとさせたい。	こんなえらいことだと思わせず、いやなことにもたちむかつていこうとさせたい。	と、えらいことでものりこえさせたいと心の中で励ました。	

である。

折角はじめは自分たちでするつもりでいたので最後まで努力させてみよう、強いて手伝わなかつた。

・衝立をたてるのに大分苦労をしたので、あとかたづけができなかもしれないと思い、最後の言葉あと始末の念を押した。

最初ちょっと無理かと思ったが、二人が仲のよい友だちであつたので協力が十分しあえるだろうと思い、手伝わなかつた。

・二人が重たい衝立を押しているときの表情は、決して暗い表情ではなく、私たちでもやつてみせるといったファイトを感じさせられた。

・教師は手こそ貸さなかつたが、気持ちの上では真剣に援助し、暖かく見守つてやつたのである。

・二人で衝立がたてられたとき、二人が頑張つてよかつたという表情をしていたように思え、それが辛いことを乗りこえたあと満足感ともよみとれて、無理でもさせてよかつたと思つた。

とにかく無理をさせることが子どもに抵抗を感じさせるからと、抵抗を排除することが強調されがちである。しかし、子どもにそのとき安定感が十分認められ、積極的意欲的態度で生活に立ち向かっているときに、自然な形で抵抗に直面した場合、排除してやるよりもむしろ強いて立ち向かわせること

事例(1)

子ども	教師	教師の気持ち
Aお当番さん机を出しゃ。	Aお当番さん机を出しゃ。	よく気がついてつてくれたと思う。
当番(だまつている)	当番(だまつている)	当番をさつとすればよいのに。
A出したろうか。	Aはやさしい気持ちをもつてているなど思った。	
B自分でいいや。	友だちのことをいろいろ考えられるようになったのだと思つた。	
A手伝うてもよいやんか。	お当番さん、お友だちが手伝つてあげるいうれしかつた。	
Cかわいそうやんか。	お当番さん自身にやらせたかった。	
当番(だまつて立つている)	お当番さん、お友だちが手伝つてあげるいうれしかつた。	
Aちゃんとがよいこと	お当番さん二人で机直せるね。	
当番(だまつたまま机を出す)		

によってそれを克服させ、自信を得させた方がより高度な生活に向かおうとする意欲を起させるのではないだろうか。

いつてくれたか、
お当番さんがきはつ
てできたのね。

A (嬉しそうな顔を
する)

(考察)

- ・この日の当番は何時も早く行動ができないので、どんなことがあっても最後までやらせるつもりであった。
- ・またこの当番二人は誰とも友だち関係ができないので、こんなことを機会に一人の関係でも持たせようとした。
- ・しかし教師のそのような思いとは別に、A、B、C三人が当番たことが教師を刺激した。
- ・つまりこの時の教師は、当番二人にさせることに気をとられて、周囲の子どもの動きを忘れていた。
- ・当番二人がやっと動き出してくれて教師はやれやれと思ったが、この二人が動けたのは、A、B、C三人の暖かい気持ちが通じてそのことで二人が動けたのだろうかと教師は思えた。
- ・そのことから教師の言葉として自然に、Aちゃん云々がいえたし、その後までずっとA、B、C三人の子どもの暖かい思いやりの気持ちが教師の印象に強く残った。

何時も自信のもてない二人の当番が困っていることを教師は知っていたが、強いて知らないふりをしてあくまでもやらせてみようとした。一見、反受容的とも思えるこの教師の姿勢に、二人の当番はやむを得ず立ち向かわされたのであるが、このときの不満な感情は後で成功感となって子どもに喜びを感じさせている。生活に立ち向かっていこうとする自信や意欲もこのような抵抗の条件下に時折出くわすことによってそれを乗りこえたとき、一層高まりを示すのではないかと思う。

事例(2)

子ども	教師	教師の気持ち
(教師の手をしつかり握つて離さない)	先生、手を洗いたい し洗うわね。	いつも手を握つて離れないで、少々しんきくさく思つていた。この子と手をはなしたい。
(だまつてている)	まゆみちゃんも洗つてごらん、先生の手こんなにきれいになつたわ。	何も知らないから、手を洗うことぐらいさせてみよう。
(無表情で、だまつてている)	手を洗うことぐらいいきれないのかと思	

つた。

- (考察) 教師が洗いたいといったのは本心ではなく、始終手を握って離さないM児の手を離したかったのである。
- M児自身は手を洗いたがっていたのでは決してなく、それよりも教師にしつかり手を握っていてほしかったのである。

- 教師はM児が何時もしようとしているので、せめて手を洗う行為でもさせてみようとしたが、M児にとっては手を洗うこと以前に、教師の手を離すことさえできなかつたようである。
- 教師は最初M児に、手を洗わせるための働きかけ、をしたつもりであったが、これはM児にとっては大変な抵抗であつたようである。抵抗を与えるにしてはM児は教師の手を一瞬も離したくないほど不安定な状態で、与えられた抵抗を乗りこえる気力などみじんも持つていなかつたのである。

- 教師はM児の手を離したい気持ちと同時に、M児に手洗いの経験をもさせたかったのであるが、不安定なM児に何をさせようとしても受けつけないことを思い知らされた。

教師は最初働きかけるつもりでM児に接し話しかけたのであつたが、これは決して働きかけたのではなく、まさしくM児

に抵抗を与えたのである。しかし極度に不安定な状態のM児が抵抗を克服するはずがなく、一層M児を不安定にしてしまつた。抵抗は十分安定した状態の子どもに時折自然な形で与えるべきで、決して無暗に常に与えるものではないということを認識した。

事例(四)

子ども	教師	教師の気持ち
A、B先生、かぶせて(水泳帽をもつてくる)	自分でできないの。	こんなことがどうしてできないのだろう。
A、B前か後かわか らへんの。	かぶつてみたの。	しないでいっているなと思った。
A、Bうううん。	かぶつてみてごらん、AちゃんとBちゃんと見せあいつこしてね。	自分たちでお互いのあいだでやらせたい。
Bできひんわ。 C先生見ててな。	鏡をみたらどう？	まだ教師をたよつ

よ。

ていると思えた。

わからぬことを

いう子どもだなと思えた。

A、B先生、鏡と違うのやで、おもしろいなー（走って鏡の方へ行く）

A、B紐くくつて

二人で結びあいっこしようね。

最後までやらせたい。

Bよう結べへん。

Aは結んでもらつてBのを結べない。

しようと努力しないのだろうか。

(考察)

・教師の感情が強く働いている時、鏡とちがうのやでおもしろいなー。といった子どものあまりにも純真な気持ちに教師自身考え込んでしまった。

・このケースでは、この子どもが自分で帽子がかぶれたらそれでよいのではなく、例えかぶれなくても、一生懸命かぶろうとする姿勢があればそれでよいのであった。

・かぶろうとする子どもの姿勢は、かぶらせたい教師の気持ちをぐいぐい押しつけることではなく、教師と子どもが素直な気持ちで結び合えることによって、自分もかぶせてみよう、という

気持ちを起こすのではないかと思つた。

・このことは最初の教師の言葉である、自分でできないの、が非常に攻撃的であったことからも強く反省した。

・最後、よう結べへんといったことからも子どもは最後まで自分で結んでみようとはしなかったのである。

・また問題は、みあいっこしてごらんといった時、教師は最後まで見届けようとする監視の役目で見守っていたことである。

・鏡をみたらどう、といったのは、教師自身が監視的な気分に気付いたので、これでは子どもが窮屈だらうと思ひ、その意味で鏡をみたらええ、といったのである。

・最初から攻撃的であつた教師としては当然の事態で、この時監視の意味で見るのでなかつたら結果は変わつたかもしれない。

・つまり、かぶれないで困つている子どもの気持ちを素直に取つてやろうとする教師の姿勢であれば、先生みてあげるから一生懸命かぶつてみようね、といえたであろうし、子どもは暖かい教師の心に触れながら最後まで努力してかぶろうとしたかもしれない。

この事例では、教師の意図がどのようなものであつても、それを一方的に押しつけた場合、子どもは素直に受け入れようとはしない。反対に最初の教師の態度が攻撃的でなく受容的

であったなら、自分でかぶらせてみようとする教師の働きかけは、これは押しつけでなく、むしろ子どもへの良き抵抗となつて、一層自分でやってみようとする意欲を高めたかもしれない。

以上の四項から総合して考えさせられたのは、教師自身の態度についてであった。

子どもの態度変容については、生活態度形成のプロセスにおいて、当然期待されるべきことであるが、子どもの態度変容を期待する教師の姿勢は、とりもなおさず教師の態度変容といえるのではなかろうか。教師自らが子どもたちの態度形成の教育の条件に、少しでも近づこうと努力する、この前向きの姿勢は、すなわち教育の条件の基盤ともなるべき理解と受容に努力する教師の姿勢であり、これは明らかに教師の態度変容の第一歩である。そしてこの教師の態度変容の第一歩こそが子どもの態度変容の第一歩を意義づけるのである。すると、教師の態度変容の第一歩が期待できない時には、子どもの態度変容は期待できないことになる。事実、子どもをよく理解し、受容することのできない教師は、子どもの態度を望ましいものに変容させることができないということは、事例の多くで実証されたのである。

教師と子どもとのこのような態度変容の関係は、その表面的な

変容を意味するのではなく、むしろ内面生活の変容を意味するものであることを知らなければならない。教師が子どもの内面生活を洞察し、子どもの気持ちをまともに受容するときには、子どもは教師の暖かい心情に触れ、その生活態度を更に望ましいものに向かって変容させずにはおられないであろう。教師の態度変容が、その心情を暖かいものにし、教師の暖かい心情に触れた子どもは、その生活態度をより望ましいものに変容させる。このような心情と心情との触れあう教師と子どもの人間関係、これこそは人間形成、態度形成の過程になくてはならない大切な要素であると思う。

このように述べてくると、生活態度形成のプロセスにみられる子どもの態度変容は、実に教師の態度がどのように変容していくにかかっているといえるのではないか。口先だけ、言葉だけで形式や順序を教え知らせることが態度形成でもなければ生活指導でもない。教師が子どもに教える以前に自らの態度をまず変容させることである。指導方法や指導技術の研究、あるいは教材研究も大切である。しかし、それがどんなに立派な研究であっても、実践の場で子どもに接する教師の態度が子どもに先ず受け入れられるべきであり、子どもに受け入れられるべく努力する教師の態度こそ、子どもの態度を望ましいものに変容させる大切な要素であることを知つたのである。

(大津市立大津幼稚園)